

「閉校になった旧月楯小学校の取り組み」

所属:最上支局

氏名:金田綾子

最上町は、中心部の月楯地内より中石器時代初頭のものと思われる石器が発見されている他、縄文時代の遺跡も東西に流れる河川沿いに数多く発見されており、人々の生活の糧となる豊かな自然の恵みを支えに、古くから人が好んで住んできた土地柄であったことがうかがえます。

昭和53年、山形県教育委員会によって、県営圃場整備事業に伴う発掘調査が行われた際の水木田遺跡からは、復元可能な土器が多数発掘されました。

その水木田遺跡の一角に旧月楯小学校があります。昭和29年の町村合併により最上町が誕生した当時は、8つの小学校と4つの中学校がありましたが、人口の減少、少子高齢化に伴い平成29年度の段階で、5つの小学校、1つの中学校に統合されました。平成30年度には小学校が1校、平成31年度には2つの小学校が順次閉校になる予定で、最終的には、平成32年度からは小学校は2校になる予定です。このまま少子化がすすめば、小学校は1校になることが予測されています。

そういった状況の中、月楯地域にある月楯小学校も平成29年度の3月末をもって、明治13年の創立以来138年の歴史に幕を閉じ、閉校となってしまいました。大正大学の平成29年度の一年生の実習カリキュラムの一つとして、「閉校になる月楯小学校を核に地域住民の方々はどうな思いをいただいているのか」、「これから先どのような活用方法が考えられるのか」についてアンケート調査を実施しました。

その結果、地域住民の方は、学び舎は統合されても、小学校を核として育まれてきた地域に根差した文化、歴史は継承していきたいという意識を強く持っていることがわかりました。

旧月楯小学校区の皆さんの学校に対する愛着と協力、そして誇りは全く変わらず、「地域とともにある学校」が旧月楯小学校の最大の特色であり、その象徴・シンボルとして平成26年度から学校、子ども達、そして地域住民一丸となって「楯っ子田んぼアート」を実施してきました。

そして今年度、小学校は閉校してしまいましたが、《小学校から眺望できる》、《学区の人材・素材でつくる》を田んぼアートの基本方針に、5回目の田んぼアートに取り組みました。これまでは学校を中心として行ってきましたが、閉校になり教職員もいなくなったため、地域住民主体の「楯っ子田んぼアート実行委員会」の組織を立ち上げました。私共も旧月楯小学校の職員室を大学の支局の事務室としてお借りし、大正大学の支局員としての仕事のかたわら、事務局として「楯っ子田んぼアート」の一翼を担ってきました。

地域住民それぞれ得意分野を活かし、デザイン画と設計図の作成、田起こし、代掻き、そして杭打ち作業を経て、総勢120名で田植えが行われ、苗の成長と共に田んぼアートが形成されてきました。

今年度のデザインは「金太郎」で、学校が閉校しても力強く羽ばたいていてもらいたいという願いを込めて作成しました。

10月の稲刈りの際は、大正大学の一年生と三年生の実習生、水田先生も一緒に参加し、終わった後

【地域支局通信】

は地域住民の方々と一緒に山形名物芋煮に舌鼓みを打ちました。あいにくの台風に見舞われ、強風の中での稲刈り作業でしたが、学生にとってはいい思い出になったことと思います。地域の方々からは、できれば田植えにも参加して欲しいという言葉が数多く聞かれました。来年度のデザインの構想も着々と進んでおります。

大正大学の実習生も旧月楯小学校の教室をお借りし、三年生の実習の拠点として活動してきました。

今年度の一年生は、既に閉校した満沢小学校の地域の方にアンケート調査を実施しました。これから閉校になっていく小学校区の方にアンケート調査を実施しながら、学校に対する地域の方の思いを含め、それぞれの地域の特色を活かした上で、町の活性化に繋がる活用方法を学生の視点と共に提案していければと考えています。

